

## 5 災害にもなう病害虫

大豆栽培の主要なタイプは、水田再編対策の一環としての水田利用であるため、通常の栽培であっても多湿条件になりやすく、立枯症、紫斑病等が発生しやすい。災害が発生し、特に風雨・水害等での悪影響は、さらに倒伏、根腐等を併発し、減収の要因となる。

このように、大豆栽培での病害は、主として糸状菌類によって起る場合が多く、まれに、バクテリア類も考えられる。マイコプラズマ様微生物、土壤センチュウ等については、特に配慮する必要性は少ない。

### (糸状菌の一般的性質)

他の作物への影響と同様、カビの一種である糸状菌類は、気象災害によって衰弱した作物に寄生しやすく、発病も助長する。特に大豆の主要病害である紫斑病では、幼靱期から子実肥大期にかけて高温と多湿条件が重なると、急激に発病を助長するし、べと病でも同様の傾向がある。

### (バクテリアの一般的性質)

他の作物と同様に、病原細菌が傷口侵入する性質があるので、気象災害では、風雨による影響が大きくなる場合がある。

## (1)水害・雨害・湿害と病害

気象災害のうちでは、上記のものの被害で発病する病害が主要なもので、防除対策を徹底しなくてはならない。

まず、大雨・長雨による大豆畑の浸冠水は、大豆の根群に甚大な悪影響を及ぼし、根腐れ、株腐病等を引起すので、浸冠水の防止等の積極的な防止対策を、あらかじめ計画し実行するほか、万一これらの災害を受けたときは、直ちに排水につとめ、根の活力保持に努める。

さらに、このような圃場では、多湿の条件になりやすく、温度が上昇すれば好適な糸状菌類の繁殖条件になり、紫斑病、べと病の発生につながる場合が多い。

上記の緊急対策を実施したあと、防除対策として、必要に応じ(災害時期によって判断)、農薬散布を実施し、病害虫を未然に防止する対策をとる必要がある。

### ア 紫斑病

発芽した時から収穫期まで発生するが、本病の防除適期(開花終了から子実肥大期)頃の上記の災害が発生すると被害が大きくなる。通常、開花期から子実肥大期にも2-3回の防除が必要である。

病害虫防除基準にしたがって防除適期を逃さないよう留意して散布する。

### イ ベト病

本病は、生育の初期から発病するが、比較的高温、多湿な条件で多い。夏季は一時病勢は衰えるが、災害時には発生を助長するおそれがある。9月以降再び病勢の進展期があり、いずれの場合も雨や多湿による影響を最も受けやすい病害であるため充分注意する必要がある。

防除は病害虫防除基準にしたがって防除適期を逃さないよう留意して散布する。特に有効なものがないが、紫斑病と同時防除剤としての薬剤に期待する。(銅剤)

## (2)風害と病害

大豆病害と風害については、直接には影響はないが、間接的病害としては、前記の二病害がある。いずれも圃場内、株間の多湿条件が発生したときの問題で、防除対策は上記のとおりである。

## (3)干害と虫害

大豆害虫として、カンザワハダニがあるが、本虫は、高温・乾燥(干天害時を含む)時に、またこれらが続いた場合にみられる。この性質は他のダニ類に共通したものであり、干害を受けた年には注意しておかねばならない。本虫は年5-6世代を繰り返し、葉に寄生する。

発生した場合の症状としては、次のようになる。

- a 大豆の葉が褐変して急激に枯れ上がることがしばしばみられる。
- b 大豆の葉裏をよくみると赤褐色のハダニがみられる。

これらを確認したときは、早目に防除する。

防除は、マラソン乳剤2,000-3,000倍液など病害虫防除基準にしたがって実施する。

なお、このような災害時のハダニは、多発する傾向があって、防除後の生き残りが多くなりやすい。薬剤散布は、葉の表、裏に充分かかるように、また、通常より1-2回追加した回数が必要な場合が多く、3回の防除は必要である。